

## 「遅い気づき」

R. A. メリット（南山短期大学名誉教授）

私の経験は、典型的でないと思うし、他のTグループのトレーナーの経験と似ている点があれば、参考になるかも知れません。なにしろ、私が担当していたTグループ（かなり前なのですが）のあるメンバーから、最近いただいた便りによって、深く反省することを刺激された、恥ずかしい思いと申しますか、とにかく手紙を読んだところ、申し訳ない気持ちが起こりました。どうしてかという、Tグループ当時、彼女の気持ちと、私が見た彼女の有様とは、かなり違ったと言うことに最近まで気づかなかったのです。つまり、あるTグループメンバーの精神状態を正確に捉えられなかったのみならず、彼女の気持ちについて、正反対であるかのように見なしていた。恐ろしい事には、当時の他のメンバーの気持ちについても、同じように見違えていたかもしれません。なおさら、Tグループの体験後提出された、彼女のレポートを読んだ時でさえ彼女がもっていた問題に気づかないで面談が行われた。彼女がレポートに、「私だけ合宿前と比べて何にも得ていないわけではない」と書いた消極的な気もちがあったのに、私は彼女が、収穫が結構あったであるかのように解釈して、「〇〇さんは、前向きなレポートを書きましたね」と言った。それが彼女にとって「ショックであった、ちっとも前向きじゃなかった。」要するに、彼女が結構つかんだと思われていることが「すごくつらかった」、ずっとTグループ体験を振り返る度に、苦しい感じを味わったみたいです。

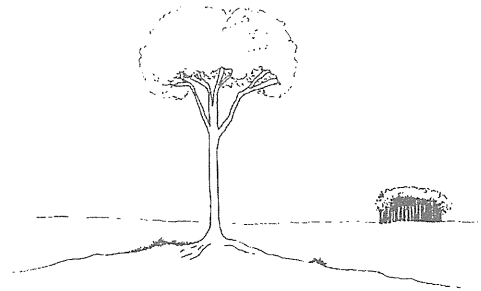
このケースが、さほど珍しいものではないかと思われるでしょうが、著者は担当したTグループの他のメンバーが、どういう反応をしたかを確かめるように、問い合わせたくなりました。問い合わせた結果として、応えた人のほとんどは、彼女が不満をいだいた程に不満の思い出はない、と言えども、やはり、Tグループトレーナーとして、メンバーにどういう影響をおよぼして、そして、その余波をより丁寧に追跡する事が、どれほど大切なことであるかということ

を教えられました。

でも、より丁寧と言ってもそれこそ大変な仕事だと思って、どういう風にしたらいいかと、聞かれたら、その方法として、何も、もっともらしい考えがないのです。ただ言えることは、在学中のフォローアップ、それがカリキュラムの規定的要素に過ぎないのであるかのような方法は、物足りないことであると、思うようになりました。

トレーナーとして、私のように肝心なメンバーが、どういう風にその体験を受け止めるかを見落としてしまうことが、問題に違いないのですが、体験後のケアを怠ることは別な問題として、ここで指摘するしだいです。少なくとも、Tグループ体験の時と、メンバーが卒業するまでの間、ケアをより徹底したらと思われまます。繰り返しますが、ご多忙中の人間関係科教員にとって、かえって不親切な暗示であると思うにもかかわらず、次のような事はどうでしょうか。つまり、ある種の記入用紙を活かして、学生と学内のTグループトレーナーとのやりとりをより多く行った方がよいと思うわけです。何についてかと言うと、参加者にとって心残りの事や問題に限らず、大変感激したことなどもです。

ややこしい暗示をするのに、躊躇することなきにしもあらずですが、皆さんと御一緒に配慮しない限り、独断に思われるでしょう。しかし、皆さんが希望していらっしゃるころのTグループ効果を高めるのに、アフターケアをもっと真剣に考えることが、のぞましいといって異論はあるでしょうか。



## Tグループ・トレーニングの 場に座するとき

會 澤 俊 三 (名古屋聖霊短期大学教授)

### 私にとってTグループの場に座するとき

Tグループ・トレーニングの場に座するとき、参加者のまなざしは常日頃身に付いたその場限りの外面的な物の見方から物事の深みを探求する哲人的なまなざしへと変わっていく。自ずとそこに生起する人間関係の諸現象の因って立つ根源を見詰めようとするのである。つまりTグループ学習の場は、基本的に、日常的な物の考え方からもう少し深い次元での自己に立ち還ることができるように、自己と他者に対座する時と場とが確保されるよう設定されているのである。その中で参加者は、日ごろの煩忙の時と場で成し得なかった人間と人間関係の深みの問いに応答し、人間として必ず出合う「問う人間が同時に問われている問い」の深みに自分の身を置くことができるのである。

自分自身で自分自身を解釈し理解したい。そして自分自身という独り個人だけでなく、関係存在としての他者をもより深く理解したいという人間としての根源的な願いを、そこに共に座す者が深く分ち合い得る人間関係の風土を、他の誰でもない自分たちで形成することを可能とする場なのである。日常の些細なことの中で人間の絡み合いとぶつかって、そして分からなくなる。そういう時のその人間を再び謙虚に見直すまなざしに光をあて、そういう地道な人間理解というものを進める緒を掴む機会と為し得るのである。

人間存在の意味を問い続けながら生きていくということが人間の本質であるならば、今その時々の方がその本質に沿った生き方をしているか否かを、時折心の中で真摯に問い掛けてみる時間と場所を持つこと無しに、自分の生きる意味を発見するという歩みは絶えてしまう虞があろう。そして自己と他者との人間の成長の可能性と責任を相互啓発的に分有する間人間として自分を相応しく位置づけたいと願うとき、具体的に起こった人間関係の出来事の体験の反芻

の中で、人間が人間として本当に価値あるものとは何であろうかという私の深みで常に反復する問いに再び戻って問うてみる時間と場所を設定すること無しに、さらなる人間的成長を期待することは困難なことであろう。

以上の考察に立ち、現代社会が構造的にもつ非人間化・反人間関係化の潮流の中に足掻く常日頃の自分を顧みるとき、私にとってTグループの場に座すとは、人間を深く見詰めまた人間関係の学びを謙虚に学ぶために得難い真摯な人間関係の時と場を提供してくれるものと理解したい。

## 交わる価値と成る価値を求めて

今日の教育学および教育方法論の動向と対比して典型的なTグループ・トレーニングのもつ理論と実践を考察するとき、それは他のより伝統的な学習モデルと識別し得る特色ある人間学的な学習方策と目標が設定されており、またその成果と及ぼす影響についても優れて期待される効果を多く含んでいるものといえよう。また教育人間学および教育価値論の側面からみると、Tグループの場は今日の間教育が最も問われている互いの心が「交わる」という価値と私が意欲し決断して「成る」という価値の領域での学びを参加者が意欲的に取り組み得る援助的学習構造を備えているものといえるのではなかろうか。

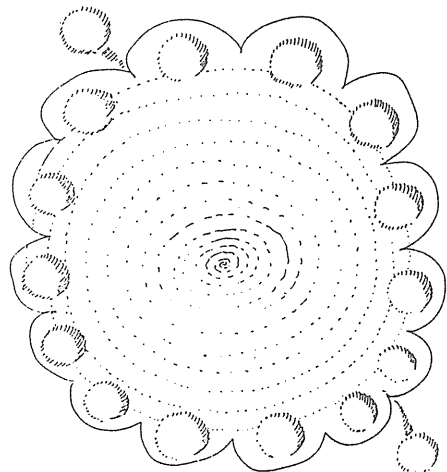
Tグループ学習の理論と実践の場は他者との直接的な関わりを必須前提要件としている。それ故に、体験を吟味し、妥当な一般化を引き出し、真実な関係の確立を試み、スキル獲得と行動の基礎にある価値観を吟味し、またフィードバックを受容するなどの学習活動をなす際に、参加者一人一人の心のうちに絶えず根源的に問われていることは、他者との関わりを必然的にかつ直接的に前提する価値であり、それは他者との心の交わりを産み出す価値ではなかろうか、Tグループ・トレーニングの目標が真に関係の中に生きる人間への変革を目指しているものであるとするならば、他者を己と同じ掛け替えのない人格をもつものとして深く認め合い関わり合うときにはじめて産み出されるこの人格的に「交わる」価値を、他の諸々の価値を超えて、或いはそれら諸価値を効果的に獲得する行動変革を起こす際の基礎的な価値として適切に位置づけられるべきではなかろうか。何かそれは恐らく共に喜ぶ、あるいは共に苦しむような人間の実存体験のなかで、一番深いところでの情動性というものに根差しているものと思われる。この本来的に人間関係的な価値を受け止めるに困難な今日の間関係の状況下において、各人のもつ存在することの喜びと運命の重さを、互いに、心から、人格的に、真摯に受け止め分かち合い得る人間的な学習の場は大切である。

どのような最良の教育を受け、またどのような最善の状況と手段を持ち合わせても、学ぶ者自身がこのような人間に成りたいと努力し決断する。その意欲と決断に基づいた訓練がなければ絶対に成就し得ないのが、私が「成る」とい

う価値ではなかろうか。他の諸々の価値はそれを求める者の外側に成就するのであるが、私が「成る」という価値は求める者の内側にしか出てこない価値である。もちろんその実現には諸々の価値もまた他者の援助的関わりをも必要とはするであろうが、なおかつ己自身の中にのみ知られ己以外の誰もがこの扉を開くことの出来ない己の意欲と決断に基づく私が私に成るといふ、そういう価値である。

教育の価値の最大のものがこの私が「成る」という価値にあるとするならば、この意欲と決断を伴う価値の成達は生涯にわたって学び続けられるべきものであるといえよう。Tグループの場に座し、まず「今ここで私は何を学びたいのか」と自問するとき、私の心の底に常に去来する「人間とは何か」そして「人間にとって何がふさわしいのだろうか」の教育哲学の根底にある人間存在の理解への問いを、私が「成る」という価値の側面から噛み締めるとき、私はそのふさわしいものに向かってこれまでの自分を一步踏みだし、私は何に成りたい、なお何をすることが出来、なお何をしなければならないか、との意欲と決断を伴う「問いつつ成る」人間・人間関係刷新に向けての絶えざる私自身の応答をより着実にすることができるのではなかろうか。

以上の考察を踏まえ、改めて私にとってTグループの場に座すとはと問うならば、まず「交わる」と「成る」の価値の領域に私のまなざしを向けることであるといえよう。



## Tグループで思うこと

大 森 正 樹（南山短期大学助教授）

以下はこれまでTグループを体系的に研究したり、それについて十分な考察をしたこともなく、また正直いってTグループに完全には馴染めていない者が、ただ自分の受けたTの経験と僅かながら学生達とのTでの経験をもとにして勝手気儘に思いを回らせたものとお考え願いたい。それゆえ、思い違いや見当外れなこともあろうと思うが、それはそれで御指摘願えれば幸いである。そこでこれまで考えたことを思いつくまま簡単に記してみよう。

Tグループが開発された経緯には色々の要素が絡んでいるのであろうが、日本ではなく、アメリカでそれが生れたということは、多民族国家での現象ということや技術文明による人間関係の破綻という問題の他に、そこに前提されているのは、西洋的人間観である。もちろんキリスト教の人間観もその深い所には当然存在しているわけだが、このような人間観の前提には「個の確立した人間」が明らかに存在するという考えがあるように思われる。この考えはキリスト教に固有のものであるのか、それともいわゆる西洋に固有のものであるかは、明らかではないし、さしあたり今は問わない。ただこれは、一つの間観であって、そうは考えない人間観も確かにありうるのである。思うに近年多くの人が指摘しているように、日本人の間観はどうもそのようなものとは違うものであるらしい。始めから確立して出来上がった人間があるのではなく、人と人が出会うことによってその内に現成してくる間柄のようなものが、その都度その時の当事者の関係を形成してくる。そこには確固とした「わたし」が存在するのでもなく、また確固とした「あなた」が存在するのでもない。あなたがわたしの前にあるから、わたしは「わたし」になり、あなたは「あなた」になるのである。そこには対立させるべき個は存在しないように思われる（そういったからといって自己保存の欲求をもった「我」が存在しないという意味ではない。それとは少しく次元の違った問題である）。社会全体もそのような人間の集団

としての機能を果たすものとして成立している。

西洋の人間観に立つと考えられるTグループを日本人である我々に、しかもまだ十分に大人となっていない学生に適用するとき、そこで得られるものは一体どんなことであろうか。Tグループを通して他者と深く関わるということは、少なくとも個として独立した人間同士が自我という殻を破って、相手の前に己をさらし、さらされた他者を受けとめ、再び一個の独立した人間として（しかしいつでも己ならざる他者を受けとめる用意をもって）今ここで歩むことであろうと思う。そのようにして基本的に全く異なる個と個の関わりが確められたうえで他者との共存がはかれる。ところがこのような個の自覚が稀薄な状態にあるところでは、Tグループはどのような働きをなすのか、実はそれがよく分らないのである。相手の気持ちがよく分ったとか、自分の考えをよく言い表わすことができたとか、相手の言っていることをよく聴くことができたとか、他人のことに関心がもてたとか、自分のことを大切にもらえる、というような感想があるが、それがTグループが始められた時から目指されていたことであろうか。もしそれがTグループの成果だとすると、各セッションを貫く全体会でなされることからは、なにかしら情緒的なものを狙っているということになるし、ひいてはやらせに終始することになるのではないか。また他者と関わることがその目的であるとしても、その関わるということはどの次元のことなのであるか。今ここで関係を深める、あるいは大切にするといっても、それが合宿という形で集約的に目論まれば目論まれるほど、返って日常生活とは関係のないものとしてとられがちになる（確かに合宿という形式は時間空間的に凝縮された状態であるので、印象深いということはあるが、持続性という点では問題が残るのではないだろうか）。合宿の後には白々しさだけが残りということにもなりかねない。

他者との深い関わりという言葉自体、個の確立した人間を想定したものであると思う。揺るぎない一つの単位としての個があればこそ自己以外の者を他者と認めることができ、自分と同じ思いや感情や欲望をもった者として認識するのである。相手との出会いによってのみ自己と成っていく精神風土のなかでは、深い関わりというのは常に何か一回的なもの、断続的なもの（家族の領域においてそれはわずかに永続していくように見えるが）に変性していくようである。それゆえTを体験して人が成長を遂げるといとき、何がそこで考えられているのだろうか。しかし以上のことは杞憂であるかもしれない。日本人のトレーナーがTの真中にいる以上、われわれのTは既に日本人のためのTなのかもしれない。しかしまたもしそうでないなら、つまり西欧的風土のものを日本に地植えしようというのであるなら、T以前にあるべき何かを我々は考察しなければならぬように思え、それはひょっとすると日本人にとってのキリスト教を模索することと符号するかもしれないなどと思ってみたくなる。

## Tグループ・トレーニングの 経験と家族

伊 藤 雅 子（南山短期大学教授）

Tグループ・トレーニングでの経験が今日の家族における人間関係にどのような影響を及ぼすかについて、また短大教育の中での意義について私の限ぎられた知識と自分自身の経験等を交えながら述べてみたいと思う。

今日の社会において、家族に状況は大きく変化している。工業化、都市化の影響を受けて、家族は本来持っていた生産共同体である集団としてのまとまりや意味を失い、夫婦とか親子とかいった単なる関係の集まりとなりつつあるといわれている。家族を単位とした継続的生産活動が次第に影をひそめている現状にあっては、家族が集団で活動するのは余暇を過ごすときだけといっても過言ではあるまい。しかし純粋に夫婦だけの家族を除けば、ほとんどの家族は親とか子が同居しており、夫婦の関係に親子という別の関係がプラスされることになれば、やはり集団と考えるべきであろう。そして今日の家族ではこの集団のメンバーが関係をもつ場はきわめて限られたものとなってきている。

集団としての家族は、企業や組織のように明確な目的があるわけではなく共同生活そのものが目的である。そのことは家族内の関係も目的が明確に固定されていると言うよりは、むしろ漠然としており関係をもつことそのものが目的と言ってもよいであろう。従って、家族の中の人間関係は時間を経れば自然に関係が深まると思いこみがちである。しかし現実はどうもそうではなさそうであり、その理由は2つあると思われる。

まず第一に、家族内の関係は夫婦の場合は結婚という制度により、親子の場合は血のつながりと子育てが必要とする継続的な世話を通して、当然人間関係が深まるので日々の生活課題を解決さえしていればよいという安心感である。まだまだ性別役割分業意識の根強い日本の社会では、大切なこととはいえ夫は職場において自分に仕事に精根を傾け、妻は家事育児に明け暮れるなど生活を維持して行くためにそれぞれが違った方向を向いて生きているのであれば、夫婦



とは名のみでお互いの関係はおそらく深まらないであろう。親子とて同じである。血のつながりは関係がより深くなることの保証にはならない。

第二の理由は家事の性格によると思う。「家事」という言葉には様々なものが含まれ、人が生きるために最も基本的なものでありながらおそらく最も研究されていない領域といってもよいだろう。数少ない研究も家事の遂行の心理的側面は言うに及ばずその关系的側面を明らかにするには至っていない。この誰かがやらねばならず、やりだせばきりがなく、達成度があいまいな家事という仕事は、それに携わる者には自分の裁量権を大きくしている。それでいて、子どもが幼い時などは全く予期しなかった突発的事態が発生し、なにをおいてもその事態の解決を計らねばならないことも少なくない。従って自己満足を得ることやその仕事の重要性を前面に押し出して家事の遂行の中に逃げ込むことも可能だといえよう。言い換えるならば課題の達成に追われながら、そこに起きている関係の過程の側面を無視することにもなりがちである。子供が学校での出来事をぜひ母親に相談したいと思って帰宅しても母親は来客の準備に忙がしく子供の期待を無視してしまうなどは、ほとんどの母親が無意識的に、そして時には意識的に体験している。

私をはじめTグループ・トレーニングに参加した時の状況を思い起こすと家事と仕事に意欲的であっただけに、できるだけクールに職業と家事という課題を達成していくことが自分の唯一やるべき事であると思ひ込み、その思ひ込みをかなり強くトレーナーに指摘されてもその意図をすぐには理解することができなかつた。ただ自分の中でいつも抑えていた感情の大きい動きがわき上がってくるのを止めることができなかつた。自分の家族に戻ったとき、それまであまり意識的に見ていなかった子供達の眼の輝きが新鮮だったことも忘れ難い思い出である。その二年後にふたたびトレーナーズ・トレーニングに参加し、また人間関係科の教育の様々な場面を通して次第に関係のプロセスのもつ意味の理解を深めてきた。また、日常生活の中で現在の一見安定して見える関係に安住するのではなく、また次々に起こる課題の達成にのみ眼を奪われるのではなく、できるだけ丁寧に関係のプロセス（過程）を追う努力も少しづつではあるが心がけているつもりである。確信をもって述べるのは少々ためらいはあるが、子供達がそれぞれ青年期を迎え、独立する際直面した課題を共に悩みながら乗り越えることが出来たのは、私自身のTグループ体験とは無関係ではないと思っている。また日常の細々とした課題を一つ一つ解決しながら、そこに起こる関わりの過程に眼を向け、お互いによく耳を傾けて聴きあい、伝え合うという当り前の事を大切にしながら家族との関係をさらに深めたいと思っている。

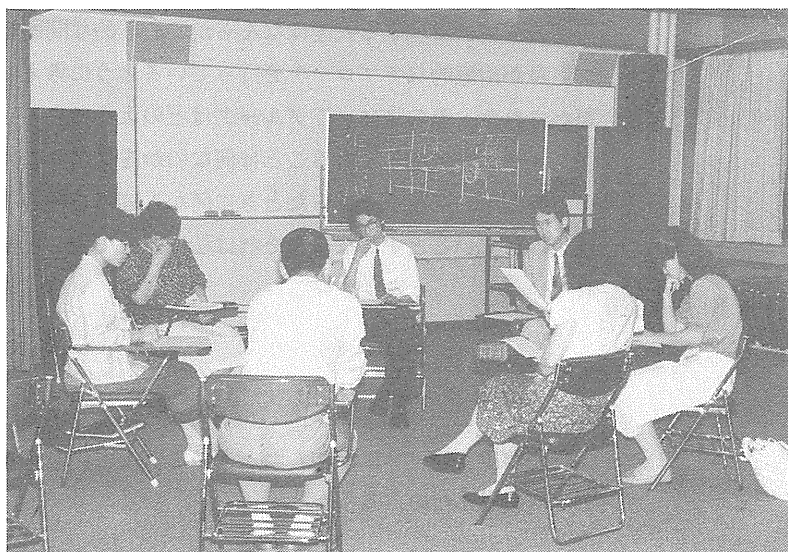
Tグループ・トレーニングの経験が家族内の人間関係に及ぼす今1つの影響は、家族のメンバーが関係を深める中でお互いの距離をはっきり認めるようになることであろう。これはR. L. ハウが「対話の奇跡」の中で述べているように「関係は距離と、ともに現在することの両方を前提とするから」(p.85)に

ほかならない。Tグループの中で、メンバー同志の間にたずねたり応答したりする「いま、ここで」の関係が成立するとメンバーは真の共感を体験するが、これはあくまで「共感」であって「同感」ではない。自分と他者がはっきりと独自の存在であることを確認しつつ体験する共感である。この共感の子供が成長していく過程で親が排他的に子供を独占したり、その独占によって子供の成長が妨げられたりする危険性を少なくするであろう。関係における距離は、常に対話の必要性を促すものである。親から子供が独立する過程ではもちろんのこと、高齢化社会においては親が精神的に自立するためにもこの関係における距離の問題は欠くことが出来ない。

南山短期大学ではカリキュラムの中心にTグループ。トレーニングが組み込まれており、高等学校から入学してきた学生達がこのトレーニングをうける。何人かの学生達はこのトレーニングを体験した後、人間関係科の他の授業で学んだ事とも関連づけながら、まず自分の家族関係を意識しはじめ、次いで時には少しずつ変えようと動き始める。親と生活上の最低限のところに関わっていた関係は、しばしば親との関わりの過程に眼を向けた上で、親と「同じ土俵にたって向き合う」関係へと変化させている。しかし大部分の学生は2年間の在学期間中にTトレーニングの深い意味を確実に理解するまでには至らず、またそれを期待するのも無理であるかも知れない。しかし彼女達が卒業、就職を経験したのち自分の家庭を築いて行くときTグループでの体験は必ず生かされると思っている。Tグループ・トレーニングの体験を生かし、「社会の一隅を照らす光」の様な役割を果たしてほしいものである。

## 参 考 文 献

R. L. ハウ著、松本昌子訳 対話の奇跡 ヨルダン社、1977.



# Tグループ実践への提案

## — 私のTグループ体験から —

津 村 俊 充（南山短期大学助教授）

私は、一応社会心理学を学び、人がどのように他者のパーソナリティを認知するかといった、いわゆる対人認知の研究を行ってきた。南山短期大学人間関係科にやってきて今日では、Tグループ（広く体験集団）に関する研究を報告する機会が多くなるにつれ、仲間の集まり（研究会など）では臨床的な視点からの発言や話題提供が期待されるようになってきている。この臨床的な視点といった場合には、人間を細切れにして実験・調査し分析する従来の行動科学としての心理学ではなく、人間そのものをトータルに捉え人間を大切にしていくなかで実践・研究を意味していることが多い。この考え方はTグループによる人間理解へのアプローチの基本的な姿勢であり、今日の心理学において欠落しがちな視点なので、私なりにできる限りの期待に応えていきたいと考えている。

ところが、今秋の日本心理学会の帰りに友人（社会心理学者としては著名な方だが）とTグループに関する話をしながら帰ってきた時のことである。彼はTグループに参加する人達はなんらかの心理的な問題を抱えており、Tグループ自身が治療的なアプローチを行っているように考えており、私はそのことに驚かされた。その時は、Tグループはどのようにして生まれてきたのか、またTグループが目指していることは何なのかを私なりに説明したのだが……。先ほどの臨床的な視点と言ったときに何か人間の心理的な疾患を治療する行為だけを指しているとするなら、それは私にとって少し違和感を抱かざるにはおられない。

### 1. 私のTグループ体験から

自分がTグループに参加したときのことを思い返すとき、果たして私はあそこで何を学んだのだろうか。

1つは、私自身がグループのメンバーと何か楽しい時間を持ちたいと考えて「何かをやりたい」と提案したとき、「グループのメンバーはあなたの何でもやりたいことをやれ」と言って、私が彼らへ働きかけるまで待っていてくれたことが強く印象に残っている。そして、次のことは私にとっては瞬時の出来事であったように覚えている。自分一人の中であれを言おうかこれを言おうかと思いついて、まさに自分の殻の中に閉じ籠っていたとき、そして次の瞬間自分の働きかけを待っていてくれる仲間の顔が目にはいった時に、暖かく見守ってくれているメンバーの存在を感じ何か熱い思いがこみ上げてきたことが今でも鮮烈に印象に残っている。他者を信頼をすることの難しさと大切さを学んだのである。

もう1つは人間関係科で教職をとる人間としてこの科で大切にしている学生自身が何を感じ、何をしたいと考えているかといった問いかけが、そうした自分の体験を持つことから比較的自由にできるようになったことが上げられる。

以上のような体験は今も私にとって貴重な体験として残っているわけである。しかし、そこでグループの中でどんな事が起こっていたのか、いわゆるグループ・プロセスはどのようなものであったか、全く私の脳裏からは消え去っているのである。また、Tグループの中においてもグループ・プロセスについてあまり吟味することもなかったように記憶している。今もこのことが私の中にはモヤモヤとした気持ちで残っており、その後のTグループ実践の中においてできる限り参加者とともにグループのプロセス（グループの中で起こっていること）を明確にしながらか展開できるTグループによる教育・研究を試みたいと考えるようになってきている。

今日の体験集団（様々なグループアプローチを含めて）によく見られるように、「グループが一つになる、一体感を持てること」があたかも大切なグループ体験の目標のように思われていることはないだろうか？ グループの中で何が起こっているかを知る時は認知的にメンバーとトレーナー（ファシリテーター）が一緒になって吟味する時間が私には大切に思われてならない。このことは、3年前に米国NTLでのTグループの研修に参加して以来、その思いを強くしている。実際、現在のNTL主催のTグループによる人間関係訓練は現在もTグループが誕生した初期の頃の研修のプログラムの原型が残っており、1日に1～2回のセオリーセッションが行われたり、研修後に参加メンバーからトレーナーを多くの項目に関して評価する時間がとられ、その中でトレーナーの介入に対して体験と理論のバランスについての評価の項も入っている。

## 2. Tグループによる学習への3つの提案

今日のTグループは体験重視型いや体験偏重型の研修になってきているような気が私はしてならない。私は体験的な側面と認知的な側面の両方のバランス

がとれたときにはじめてTグループによる学習が有効になってくると考えている。また、Tグループは「いまここで」の体験を重視しすぎていないだろうか。トレーナーは、Tグループという研修の場を離れたときにそこでの学びを生かすことができるようになることを目標にすべきである。

ベネら (Benne, K. D., Bradford, J. R. & Lippitt, R. O. 1964) はTグループを実践する際のプログラムの設計の仕方について論述しているが、今日のTグループの実践の中で特に欠如しがちだと考えられる3点について再考し、それらを実践の中で実現することを提案したい。それらは、(1)認知的なインプットとしての「セオリー・セッション」を設けることと、(2)「あのときあそこで (there and then)」に焦点を当てるTグループ実践、そして(3)「Tグループ実践とリサーチとの統合」の問題である。

### (1) セオリーセッションを設けること

最近のTグループでは、研修における基本的な理論とかモデルを紹介するようなセッションを持たない傾向があるように思う。小講義などのセッションを持つと参加者にある方向づけをすることを心配し、参加者の主体性を大切にしようとする研修がスタッフの意図する方向にひっぱられる可能性を含んでいるという理由であまりセオリーセッションが行われなくなってきた。

果たしてそうなのであろうか。参加者が体験から学ぶことを促進したり、一般化することを助ける概念的なモデルを提供することは意味があるのではなからうか。スタッフであるトレーナーが基本的に身に付けている視点とか枠組を提供することは大切なことであると思われる。例えば、グループ・プロセスを見る視点にはどのようなものがあるのか？ フィード・バックはどんな意味を持っており、どのようなフィードバックが効果的なのか？ 集団の発達過程とはどのようなモデルが考えられているのか？ 等々さまざまなTグループを体験し研究しているトレーナーが持っているリソースはたくさんある。このようなトレーナーが持っているリソースはできる限りオープンに提供されることが望ましいと私は考えている。学習者である参加者は自らの体験に合わせて自分に必要な概念やモデルを組み込んでいくことができると信じている。

また、小講義などによるセオリーセッションは研修を終えてから、日常生活においてTグループで学んだことを実践したり、再学習することを助ける機能を持っていると考えられる。

### (2) あのときあそこで (there and then) の大切さ

Tグループの誕生から見ると、研究者達のグループ・プロセスの分析・診断や概念的な提示だけでは十分なグループのプロセス理解は難しいことがわかり、「いまここで」の体験を参加者と共に話し合うことでより人間関係のダイナミクスを理解することができるようになったことがTグループの発見のきっかけ

である。

その後、ゲシュタルトセラピーやTAなどの技法がTグループの中にも導入されるようになり、一方ではエンカウンターグループの影響を受けることによって、さらに「いまここで」の体験の重視が強調されすぎているように私は感じている。参加者は、とすれば、非常に狭い時間的空間的存在だけを「いまここで」の意味に捉えがちであり、トレーナー自身もその傾向に陥る可能性があるように思われる。

Tグループに代表されるラボラトリー・メソッドによる教育は「いまここで」を大切にすると同時に「あのときあそこで」の経験にも焦点を当てる教育であることも必要であると考えている。それはグループに参加し、そこで見られるメンバーの関わり方は絶えず「あのときあそこで」の日常の関わり方を背負っていることを忘れてはならない。また、僅かな期間の研修を終えると、参加者は必ず日常に戻るわけである。トレーナーは、参加者が研修での学びをいかに現場に適応していくかに注意を向けておく必要がある。

### (3) Tグループ実践とリサーチとの統合

最後に、以上の点からTグループによる研修をプランニングすることと同時に、それらの成果を含めて実践結果を公に報告していくことも大切だと考えている。参加者の学習体験をあまりにも大切にすることから、近年はTグループに関するリサーチが減少してきているように思われる。また、実践家の人達は教育・研修の忙しさの中であってなかなか報告書としてまとめる時間もとれないのが現状かも知れない。しかし、ベネラ（1964）も述べているように、元来Tグループの実践とリサーチは切り離されてはならないものではないかと考えている。トレーニングと研究上の関心とを教育・研修の場において統合を計っていく必要がある。Tグループの場において生の人間関係が繰り広げられ真実の人間関係を創造しようとするダイナミックなプロセスにこそ、私は心理学における大切な研究課題が山積みされているように感じている。また、Tグループによる研修の場をリサーチの場としても運営することで始めてレヴィンの提唱するアクションリサーチが成立するのではないだろうか。

もう一度、Tグループの実践と研究を見直し、レヴィンが提唱している現実の人間社会に貢献できる研究を参加者、実践家、研究者がお互いに協力し合いながら行っていきたいものである。

## 参 考 文 献

- Benne, K.D., Bradford, J.R. & Lippitt, R.O. 1964 Designing the Laboratory.  
In L.P. Bradford, J.R. Gibb, & K.D. Benne, (Eds.), T-group theory and laboratory method, John Wiley & Sons, 61-109. (狩野素朗・原岡一馬訳  
1971 ラボラトリー的设计 三隅二不二監訳 感受性訓練 日本生産性本部 111-179.)

## Wendepunkt — 私のTグループ

グラバア 俊子（南山短期大学助教授）

私がTグループを体験した頃、ドイツ語とも4年ぐらいいつきあっていたはずであるが、私の中には何も根づいていない。ただ一つ、Wendepunkt という単語のみがその頃の私は指し示すかのように鮮明に残っている。Wendepunkt とは転回点という意味である。

当時立教大学も文学部からの問いかけに端を発し、激しい大学紛争を経験した。幾度かの団交も行なわれ、大学もかなり長い間閉じられた。私が四年生の時である。卒業後のことに関しては奇妙な程何も考えていなかった。ひょんな成り行きから大学院に進んだが、その最初の年に勧められて第一回立教大学文学部関連カリキュラムに参加した。それは大学紛争の問いかけに答えるカリキュラムの一つで、四年生を対象として各科から希望者を募り、ヒューマン・リレーションズ・ラボラトリートレーニングを行うものであった。立教大学キリスト教教育研究所（JICE）のバックアップを受け2グループで清里清泉寮で行なわれた。

もしかするとこれは日本で初めて学生のTグループであったかもしれない。パワーのあるメンバーが多く、トレーナーに対する抵抗なども、自分達が小さな輪になってトレーナーを閉め出してしまうなど徹底していた。セッション後はお酒なども入り、連日真夜中まで集まってある意味で新鮮な関わりを楽しんでいた。学内でもグループでよく集まり、その内の何人かは現在まで友人として続いている。

グループ・プロセスの理解などということが起ったかどうかは、はなはだあやしい。自己理解が深まったとだけは言えよう。しかし、今思うとこのたった6日間がその後の私の歩む方向を決定したのである。まさにこのTグループは、私にとって、Wendepunkt であった。その内容は以下の3つに分けられる。

### 1) 感情の発見

私はそれまで非常に理性レベルで生きており、対人関係において感情的になることはほとんどなかった。しかし、トレーナーの指摘により、自分が自己の感情から目をそむけ、それが習慣化することによって自己の感情に気づくことさえできなくなっていたことを悟った、今でもそのシーンは記憶に鮮明に残っている。

「今何を感じている？」

「これは大変重要なことだと思っています。」

「それは感じじゃなくて考えだよ。」

といったやりとりが何回も続き、最後に

「もうわからないわ」の叫ぶように言った時、

「そうそれだよ。それが今のあなたの気持なんだよ。」と言われ、やっと腑に落ちたのである。

これは私の在り方にとって大きな変化であった。今までは感情という大切なデータなしの片肺飛行をしていたようなものであった。

### 2) 非言語コミュニケーションとの出会い

このような自分の感情に対する気づきも影響していたと思う。トレーニング最後のセッションで、グループが輪になりメンバー一人づつに対して全員が無言でメッセージを伝えることになった。その時私は、一人の同性のメンバーに伝えているうちに彼女を堅く抱擁した。これは自分自身おどろいた。とても恥しくて以前にはそんなことは考えることすらできなかった。しかし実際にそのことが起きると、何と自然な伝え方であり、何と暖かい共感が伝わり、何と人間的な行為だろうと感じたのである。このことが言葉の限界性に悩んでいた私に大きなヒントを与えてくれた。

この体験が原点となり、私の研究テーマを非言語コミュニケーションと定めることとなった。そしてその延長としてボディ・ワークを学ぶことにもなった訳である。

### 3) 人間関係科との出会い

非言語コミュニケーションを学ぶため、メリット先生についてJICEで様々な非言語実習にとり組むようになり、Tグループの事務局、オブザーバー、コトレーナーなど多くの学びの機会を得た。そしてJICE主催の私にとって第一回目の社会人の人間関係トレーニングで、聖母カテキスタ会の吉川房枝先生と同じグループになった。吉川先生はここでの体験が非常に強く印象に残られ、当時教えていらした南山短期大学で新しい科を模索していた時、人間関係科というアイデアを出された。それが現在の人間関係科のスタートになった訳である。新学科設立のために当時のボルト理事長と相談にいらっしゃり、私も科長



として新しい教育の試みにおもむくメリット先生のお手伝いとして、生まれて初めて名古屋の地を踏んだ訳である。

それまでの漠然と何かを探し求めているという状態がこの Wendepunkt を得て、探究のテーマとして幾つかの焦点を結んだといえよう。それらは

- 理性と感性を共に豊かにすること
- 人とのかかわりの中に生きること
- 自己理解とからだということ

などである。

## 第二の Wendepunkt — 私の中のこだわり

南山短期大学でも学生のTグループのトレーナーを何度かつとめた。しかしここ十年ぐらいはすっかりTグループから遠ざかっている。幼児づれのTグループトレーナーはきついという個人的事情も確かにあったが、一番の原因は私の中に何かひっかかる所があったからだと思う。

私自身がかかわったTグループは、トレーニングとしては自分なりに一応納得のいく成果が得られたと思っている。Tグループトレーニングの意義は、自分の経験からしても充分認めているのに、一体何にこだわっているのか、今回少し考えて整理してみたい。

様々な要素を一つの言葉にしてみると、それは“不自然さ”である。選択制の導入によってある部分は解消されたと思う。残るのは二つ、一つは物理的不自然さである。あまり広くない空間にかなりの時間拘束されるし、動きも非常に少ない。私の場合、精神は昂揚していてもからだの方が悲鳴をあげてしまうのである。心身ともに健康な状況設定が工夫される必要があるように思われる。

第二は、トレーナーの役割から自由になれないでいる自分、という課題である。これはTグループという教育方法の問題ではなく、まさに私自身の問題であり、これがこだわりの一番大きな要因と思われる。自分という在り方とトレーナーという在り方が一致していない不自然さとも言えよう。私の中ではまだトレーナーだからこう言う、こう行動するということと、私が目の前のあなたに正直に応答するというこの間にギャップがあるのである。これはトレーナー論として語っている訳ではない。この不自然さが私にとって大変負担なのである。

1990年、久方ぶりにTグループに参加しようと思っている、多分トレーナーという役割にかかわりなく、私自身でいようと試みることになろう。そこで一体何が起こるのか。果してTグループが成り立つのか。相棒のトレーナーには迷惑をかけそうである。

しかしこのことは私にとっては教育という営み、トレーニングという営みの本質は何かという問いでもあるように思われる。10年ぶりのTグループは、私にとって第2の Wendepunkt となりうるだろうか？

## Tグループ随感

竹内敏晴（南山短期大学教授）

私がTグループに関わったのはわずか3回である。メンバーとして参加したこともスタッフとしての訓練もない。ただ「今、ここで、他者にまっすぐ向かい、ふれてゆく、という、私のレッスンの原則そのまま生きればいいはずだと独断してその場に立っていただけである。

ただ最初の関わりがメリットさんのアシストであったことは大きな幸せだったと今にして思う。あなたは今だれに話していますか？ ほんとに話していますか？ という問いは私のレッスンの内実そのままであったし、ちゃんと相手の話を聞いてないのは相手を尊重していないことだ、という明確な姿勢は私に目を洗うような思いを与えてくれた。

それ以後、西原さんには、今まっすぐ向いて話そうとする私の努力が、しばしば、コンテンツに傾きプロセス重視から逸れるおそれがあることを気付かせていただいたし、長尾さんは、ほんとに相手が話したいことだけへまっすぐ入ってゆく篤実さを私に学ばせて下さった。その間における人と人との対決と融け合いには恵みといってよい体験があった。

それにしても、からだを動かし声を発してレッスンして来た私にとっては、何時間も座り切りで聞き、しゃべるだけというワークはひどく疲れる。時にはゴーモンに近い。時々スツとからだ動き出した相手に近づいたり、コトバでなくて触れたく——たとえば抱きしめたり——したくなる。学生を見ている、あすこでさっと相手に手をせせばいいのに、とか、早く逃げちまえ、と言いたくなったりする。まあ、せめて、腰掛けに坐ってやってほしい。座ボタンに坐っていたのでは、立つ方向への志向をほとんど持てない。横になって休む方向へ、からは無限に近づいていく。

Tグループの中ではなく、ふだんの授業などで気付くことは、南短生（に限らないが）は実におしゃべりが好きである。私のように、かの女らの年令には

会話不能だったものから見ると、キセキみたいにまぶしい。が、さて数十人の前で発表するとなると、ひどく公式的な紋切り型の優等生的文体になるのに驚かされる。要するに、自分なりに責任あることばを発し、それを他人に手渡すこと、あるいは、ちゃんと受取り、自分の責任において答を返す、といったやりとりでひどく不慣れ、というより、高校生時代まで全く経験していないということらしい。とすれば、とにかくこの行為が成り立たねば、Tグループもへったくれもあるまいという気がしてくる。だから、Tグループ合宿は周囲の受け取り方に気づかいせず、卒直に話しかける、という行為を経験する場として、まず第一に貴重なのではないかと今は思う。考えれば、現代の日本の社会においてこのことが成り立つためだけでも、Tグループの成立条件が必要なのだと言えそうである。

それと関連して思うことの一つは、人関生にとって、Tグループがあまりに特殊な体験とされ過ぎるのではないかと、ということである。ひどく怖い、おどろおどろしいことが起るといふ神話が言い伝えられていて、そこで自分を開く体験は素晴らしいのだが、それはこの場でしか成り立たぬ特別な出来事と思込まれてしまっているのでは、と感じる。人と人ときちんと向いあうこと、今、ここで相手と共に生きること、は、日常生活においてこそ根底的に生きられねばならぬことであって、それを目指すさまざまな方法が他にもある。Tグループの非日常的な場における体験はそのまま家庭や職場には持ち込めぬ、というのは、もっとものようだが、ほんとだろうか。少なくとも、当然の前提としては大きなくいちがいが起るように感じる。人と人とが触れるということは、本来勇気がいることである。つまり、日常は真に生きようと志し始めたら〈日常的〉ではなくなるのだ。

